



ドッグオーナーのイヌの肥満に対する意識

大石武士・森中しをり・中野かをる

近畿大学農学部農学科

Dog Owner Awareness on Dog Obesity

Takeshi Ohishi, Shiori Morinaka, kaworu Nakano

Faculty of Agriculture, Kinki University.

Nakamachi, Nara. 631-8505, Japan

Synopsis

Recently, obesity in pet dogs is increasing. The owner is considered mostly responsible for the pet dog's obesity. However, there is little information available about owner awareness of their pet dog's obesity. Then, the owners of 426 dogs in Osaka, Hyogo and Nara were surveyed to verify their awareness of pet dog's obesity.

Nearly 70% of pet dog owners answered that the number of obese dogs has been increasing because they saw obese dogs more often than before. But only about 33% of the owners regarded their pet dogs as obese.

Although the main methods to control obesity in the obesity group and non-obesity group were regulation of foods and increasing stroll, owners who aggressively tried to control obesity in the "obesity group" was only about 10%. However, the actual conditions of implementation of obesity control methods were the same for both "obesity group" and "non-obesity group."

緒言

獣医学・薬学の進歩あるいは栄養状態の改善はペットの寿命を延長した。しかし、一方では、栄養過剰や運動不足などを引き起こし、それによるペット犬（以下イヌと略）の肥満を急増させた¹⁾。イヌの肥満は人の場合と同様に糖尿病、高血圧、循環器疾患、呼吸器障害など様々な疾病の要因となり、寿命を縮める原因の一つにもなりうる²⁾。欧米ではペットの肥満に対して比較的早くから関心が持たれ、肥満の実態調査が行われてきた^{3,4)}。しかし、わが国ではペットの肥満に対する関心は比較的低く、肥満の発生状況に関する情報は少ない。僅かに大型犬についての調査⁵⁾が存在するに過ぎない。

イヌは生活のすべてをドッグオーナーに委ねられており、高齢や肥満傾向にあるオーナーに飼われている場合、肥満になりやすいといわれる⁶⁾。またペットの肥満解消には獣医師の指導に基づいた根気強い減量プログラムの実施が必要とされて

いる⁷⁾が、これにもオーナーの協力を欠くことはできない。このようにイヌの肥満解消にはドッグオーナーが深く関わっている。しかし、ドッグオーナーがイヌの肥満に対してどの程度の関心を持ち、自分の飼いイヌの肥満解消のために何らかの方策を講じているかどうかについてはほとんど知られていない。

そこで、イヌの肥満解消のための基礎的資料を得るため、ドッグオーナーが自分の飼いイヌの肥満状態をどの程度認識し、何らかの肥満防止対策等を講じているかどうかを明らかにしようとした。

調査方法

本調査は大阪、兵庫、奈良地域を対象地域とし、2000年5月から2001年2月にかけて実施した。調査地点は対象とした地域に存在する比較的大きな住宅街とその近隣に存在する公園を中心とした。一地点における調査は1回とし、次の調査地点は前の地点から距離的にかなり離れた地点を選び、

調査対象となるオーナーやイヌが重複しないように注意した。調査時間帯は朝あるいは夕刻とし、それぞれの調査地点でイヌを散歩させているドッグオーナーに次のような項目について尋ねた。

- ①飼育しているイヌの品種、性別、年齢、飼育状況など。
- ②現在、イヌに肥満が増えていると思うか？ 思うとすればその理由。
- ③自分の飼いイヌの肥満状況。肥満傾向にある場合にはその原因。
- ④肥満対策の実施の有無、実施しているとすればその内容。

ただし、③の肥満原因や④の肥満対策の内容については複数回答を可とした。

その結果、426人から回答を得ることができた。なお、本調査では回答を拒まれたオーナーの数は記録していない。

結果および考察

調査対象となったイヌの種類を表1に、またこれらのイヌの飼育状況を表2に示した。

本調査では、大型、中型、小型犬のいずれをも調査対象としたので、シー・ズーなどの小型犬の割合が多くなり、その結果、大型犬を対象とした調査⁹⁾に比べ、室内で飼育されている割合が多くなった以外、飼育状況は大型犬の場合と大差は認められなかった。

最近、肥満のイヌが増えているかどうかを尋ねた結果とその根拠とした理由を表3に示した。

肥満のイヌが一般的に増えていると回答したオーナーは69.7%であった。またその根拠としては、「最近肥満のイヌをよく見かける」が54.8%と半数を超え、次いで「自分のイヌが肥満である」、「肥満犬用フードが売られている」と続いた。本調査は、イヌとともに散歩しているドッグオーナーを対象にしており、彼らは自分の飼いイヌ以外のイヌにも関心を示す度合いが高く、その半数以上が肥満のイヌをよく見かけると回答した事実

表1. 対象となったイヌの品種

品種	(%)
雑種	24.4
シー・ズー	9.9
ゴールデン・レトリバー	8.2
柴	5.9
シェットランド・シープドッグ	5.2
マルチーズ	4.5
ミニチュア・ダックスフンド	3.6
その他(41種)	38.3

表2. 飼育状況

飼育場所 (%)	給餌回数 (%)	餌の種類 (%)	間食の利用 (%)	散歩の回数 (%)	散歩時間 (%) (分/回)
室内 67.0	1日1回 20.3	ドライフード 42.7	有り 76.7	1日1回 20.2	0-15 11.6
屋外 33.0	1日2回 74.1	ドライフード+他の餌 34.5	無し 23.3	1日2回 62.0	15-30 36.1
	1日3回以上 5.6	自家製の餌 5.4		1日3回以上 12.5	30-60 33.0
		不明 17.4		数日に1回 5.3	60以上 19.3

表3. イヌの肥満に対する認識とその根拠

肥満犬が増えていると思うか (%)	増えていると思う根拠 (%)
思う 69.7	肥満犬をよく見る 54.8
	自分の飼いイヌが肥満 14.0
	肥満犬用フードが売られている 11.0
思わない 15.5	テレビやラジオからの情報 6.9
	獣医師からの情報 2.5
解らない 14.8	その他 10.8

は、それぞれの地域で飼育されているイヌに肥満状態が多いことが推測され、肥満傾向にあるのは大型犬⁵⁾に限らず、現在、わが国で飼育されているイヌにみられる一般的な現象であると思われる。

次に自分が飼っているイヌの肥満状況をどのように判断しているかを「肥満」「やや肥満」「普通」「やせ気味」「やせている」の5段階に分類し判断してもらった。その結果を図1に示した。

対象としたドッグオーナーが飼育しているイヌの肥満状況は「肥満」6.6%、「やや肥満」26.3%、「普通」57.7%、「やせ気味」8.0%、「やせている」1.4%で、大半のオーナーが自分の飼いイヌは良好な状況にあると判断した。しかし、「肥満」「やや肥満」の両者を「肥満」グループと分類するならばその値は32.9%に達した。この値は、大石らが大型犬を対象とした調査で、調査対象とした大型犬の46.3%が肥満傾向にあったとした結果⁵⁾と比較すると低かった。本調査では肥満状態の判断は、大型犬の調査⁵⁾のように獣医師による判断ではなく、オーナー自身の判断に基づいておこなわれた。従って、必ずしも統一的基準によるものでなく、正確さに欠ける可能性が存在することは否めないが、毎日イヌに接しているオーナーが、その体重やイヌに触れることによって判

断しており、まったく的外れの判断が下されているとは思われない。ただ、判断を下す対象が自分の飼いイヌであるため、判断が甘くなった可能性が無いとはいえない。それが比較的低い数値となった一つの要因かも知れない。

自分の飼いイヌの肥満状況を「肥満」あるいは「やや肥満」と判定したオーナー群を「肥満グループ」に分け、それ以外のオーナー群を「非肥満グループ」に分け、それぞれのグループの肥満に対する認識や肥満対象の実施状況などを比較した。

表4には、両グループに分類した場合の肥満したイヌが増えたかどうかという意識とそう思う根拠を示した。

肥満したイヌが増加しているとする認識は「肥満グループ」で若干高かったが大きな差異は認められなかった。両グループとも肥満したイヌが増えた根拠として、「肥満したイヌを良く見かける」ことを一位に挙げた。「非肥満グループ」は次の根拠として「肥満犬用フードの販売」を挙げたが、それに対して「肥満グループ」は「自分のイヌの肥満」を挙げ、その割合も30%以上に達し、「非肥満グループ」と大きく異なった。従って、このグループでは自分の飼いイヌを通じて、肥満は身近な問題として実感される割合が高いのであろう。

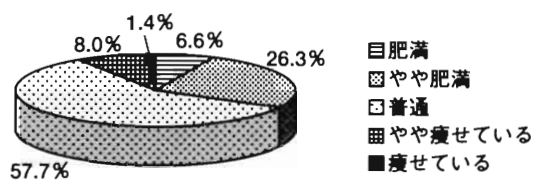


図1. 飼いイヌの肥満状況

表4. 肥満および非肥満グループのイヌの肥満に対する認識とその根拠

肥満犬が増えていると思うか (%)			増えていると思う根拠 (%)		
	肥満グループ	非肥満グループ		肥満グループ	非肥満グループ
思う	73.6	67.9	肥満犬をよく見る	40.8	64.7
			自分の飼いイヌが肥満	32.4	0.0
思わない	15.0	15.7	肥満犬用フードが売られている	11.3	10.9
			テレビやラジオからの情報	5.6	8.3
解らない	11.4	16.4	獣医師からの情報	4.9	0.0
			その他	5.0	16.1

表5に両グループの肥満対策の実施状況と実施している場合の、その内容を示した。

何らかの肥満対策を実施しているとする認識は、「肥満グループ」および「非肥満グループ」で認められたが、肥満犬の増加を自分の飼いイヌが肥満傾向にあることを通して実感している可能性の高い「肥満グループ」において約10%程度高く、このグループのオーナーにより積極的に肥満対策を実施しているとする意識が強いことが伺えた。しかし、このグループでも対策を実施しているとするオーナーの割合は60%に達しておらず、ペットの肥満の弊害が充分浸透していないことや、本格的な肥満解消は獣医師の管理のもとで行わねばならず、かなりの費用を要することなどがこのような低い結果をもたらした要因かもしれない。

肥満対策の内容では、両グループとも食餌量の制限を第1に挙げた。しかし、本調査では制限の内容まで尋ねていないため、両グループの挙げる食餌制限が標準的な給与量に比較して、どの程度の量的制限が行われているのかは不明である。そこで「肥満グループ」の食餌の制限が「非肥満グループ」の食餌制限と比較してより積極的に行わ

れているかどうか検討するための手がかりの一つとして、両グループの食餌回数と肥満発生の大きな要因の一つであるとされる間食の利用状況の相違を検討した。両グループの食餌回数と間食の利用状況を表6に示した。

「肥満グループ」の食餌回数は「非肥満グループ」のそれと大差は認められなかった。間食の利用状況は「非肥満グループ」を上回っていた。また、先に調査されたこの地域の犬用間食の利用状況⁷⁾と比較しても高い傾向にあった。

このような食餌回数や間食の利用状況から推測すれば、実態を知るには更に詳細な調査が必要かも知れないが、「肥満グループ」で、「非肥満グループ」に比べかなり厳密な食餌量の制御が実施されているとは考え難い。

「肥満グループ」では、表5に示した如く2番目の対策として、肥満犬用フードの使用を挙げた。しかし、その割合は「非肥満グループ」の7%程度に比べれば高かったものの、対策を実施しているオーナーの25%程度で、「肥満犬グループ」全体でも14%強に過ぎなかった。従って、このグループでも低タンパク質・低カロリーを特徴とする肥満犬用のペットフードが広く普及しているとは

表5. 肥満および非肥満グループの肥満防止対策の有無と対策の内容

肥満対策の有無 (%)	肥満グループ 非肥満グループ		対策の内容 (%)	肥満グループ 非肥満グループ	
	肥満グループ	非肥満グループ		肥満グループ	非肥満グループ
有	56.4	47.6	食餌の制限	32.0	34.1
			肥満犬用フードの使用	25.2	7.3
無	43.6	50.7	散歩を増やす	23.3	27.4
			間食の制限	5.8	8.4
不明	0.0	1.7	人用の食べ物を与えない	3.9	10.1
			獣医師の指導による対策	2.9	4.4
			その他	6.9	8.3

表6. 肥満および非肥満グループの食餌回数および間食の利用状況

回数	一日の食餌回数 (%)		間食の利用	間食の利用状況 (%)	
	肥満グループ	非肥満グループ		肥満グループ	非肥満グループ
1回	22.2	18.6	有り	80.0	73.8
2回	72.1	74.5			
3回	4.3	3.7	無し	18.6	25.2
4回	0.7	2.2			
不明	0.7	1.0	不明	1.4	1.0

言い難い状況にあった。これらのことから、肥満の解消を目的として開発された肥満犬用ペットフードの普及は調査対象とした地域では、まだ低い状態にあると推測される。肥満ペット用フードの普及の為には、より積極的な利用に向けてのメーカー側の取り組みが必要であろう。

散歩を増やすことも「肥満グループ」では3番目の、「非肥満グループ」では2番目の肥満防止策として挙げられた。そこで肥満グループでより積極的に散歩を増やすことが行われているかどうかを知るため、両グループで散歩時間や一回あたりの時間に差が存在するかどうかを検討した。両グループの一日の散歩回数と1回当たりの散歩時間の分布状況を表7に示した。

両グループとも、一日に2回散歩させている割合が最も高かった。また、一回当たりの散歩時間は、両グループとも15分～60分程度が中心であった。しかし「肥満グループ」では、一回あたりの散歩時間を30分～60分としている割合は「非肥満グループ」より少なく、特に散歩時間を多くしている実態を見出すことは出来なかった。従って、散歩時間においても「肥満グループ」が「非肥満グループ」に比べ、大幅に散歩時間を増やしている実態は少ないと思われた。

このように「肥満グループ」では「非肥満グループ」に比べ、肥満防止対策を実施しているとい

う意識を強く持っているオーナーの割合は多いものの、実際に行われている対策の内容としては「非肥満グループ」で肥満対策を実施していると認識しているオーナー達が実施している内容と大きな違いは存在しないように思われる。飼い犬がすでに肥満傾向にあると認識しているならば、愛犬の健康を維持するため、より積極的な健康管理に留意すべきであろう。

図2に「肥満グループ」になぜ自分の飼いイヌが肥満傾向に陥ったと考えられるかその理由をたずねた結果を示した。

このグループのオーナー達が考える肥満の原因は「甘やかし」、「運動不足」、「間食の与えすぎ」の順であった。いずれも従来から、愛犬を肥満に陥らさないために注意すべき項目に挙げられているものであり、これらのオーナーが自分の飼いイヌの肥満に決して無関心では無く、注意すべき点を知識としては持っていることが推測される。しかし、すでに述べたように、このグループのオーナー達の肥満防止対策の内容は「非肥満グループ」のうちで肥満防止を心がけているオーナー達のそれと実質的には大差が無いと考えられ、肥満防止のための知識は持っていたとしても、それを遵守し実行することが困難であるところに、飼いイヌの肥満防止の難しさが存在するのかも知れない。

表7.肥満および非肥満グループの散歩回数と一回あたりの時間

1日の散歩回数 (%)			一回あたりの散歩時間 (%)		
	肥満グループ	非肥満グループ		肥満グループ	非肥満グループ
0回	1.4	0.3	15分以内	14.4	11.2
1回	25.7	16.9	15-30分	37.9	33.9
2回	56.5	60.1	31-60分	28.5	33.9
3回	9.3	10.5	61分以上	19.2	18.6
4回	0.7	2.1	不明	0.0	2.4

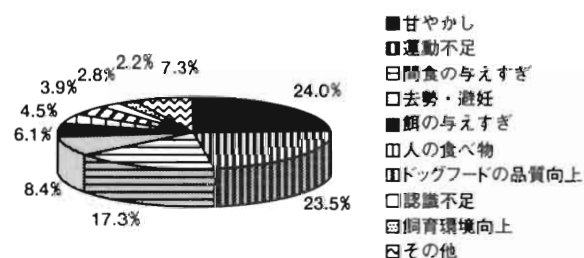


図2. 飼いイヌの肥満原因

要約

ペットに肥満が増加している。その責任の大半はオーナーに帰せられると言われる。そこで大阪、兵庫、奈良県下でイヌと散歩中のドッグオーナーに対して飼いイヌの肥満に対する意識調査を行った。

70%近くのオーナーが肥満犬をよく見かけることを根拠に現在のわが国ではイヌに肥満が増加していると考えていた。しかし、自分の飼いイヌが肥満傾向にあると判断しているオーナーは33%程度に止まった。オーナー自身の飼いイヌの肥満状況の判断に基づいて分類した「肥満グループ」と「非肥満グループ」では、肥満のイヌが増えているという認識や肥満防止対策の実施割合などには大きな差は認められなかった。

肥満グループの一部で肥満犬用のフードの利用など、より積極的と思われる肥満防止策がとられていたが、その割合は低く、両グループの肥満防止対策の主流は食餌の制限と散歩を増やすことであった。しかし、両グループのこれらの実施内容には差は認められず、「肥満グループ」においても実質的な肥満防止対策の実施状況は「非肥満グループ」のそれと大差がない状況にあった。

引用文献

- 1)古瀬充宏・村井篤嗣:ペット栄養学会誌. 2:78-86(1999)
- 2)E.MASOM:The Veterinary Record 86:612-616(1970)
- 3) A.T.B. EDNEY, P. M. SMITH: The Veterinary Record 118:391-396(1986)
- 4) D. S.KRONFELD, S.D.DONGHUE and L. T. GLICKMAN: J. Nutr., 121:S157-S158(1991)
- 5)大石武士・井上哲聡・中山正成・重岡元子・矢野史子: ペット栄養学会誌.2: 81-87(2001)
- 6)一木彦三訳:小動物の臨床栄養Ⅲ p6・4- p6・5. マーク・モリス研究所連絡事務局. 東京 (1970)
- 7)大石武士・原祐子・小林友子・西村栄子: ペット栄養学会誌. 4: 13-17 (2001)